

バンテアイ・チュマール遺跡の回廊浮彫に関する研究 —ジャヤヴァルマン7世の治世に着目して

Study on the Bas-Reliefs in the Galleries of Banteay Chhmar :
Focusing on the Reign of Jayavarman VII

田中 美和
TANAKA Miwa

1. 序論

(1) 背景と目的

バンテアイ・チュマール遺跡(以下 BC)は、カンボジア北西部にあり、アンコールから 110km、タイ国境まで 20km の場所に位置している(図 1)。ジャヤヴァルマン7世によって建設され、本研究の対象である中央神殿の回廊にはバイヨンと類似した浮彫が施されている。浮彫にはチャム族との戦争や宮殿での儀式、神話の場面などが描かれており、12 世紀末から 13 世紀初頭のアンコール王朝最盛期の歴史を読み取ることができる遺跡である。しかし、遺跡は長年崩壊したまま放置され、略奪された浮彫もある。2008 年以降修復が進められており、新たに修復が完了した浮彫の解釈が必要であると言える。

本研究では現地調査を行った2024年3月時点での BC 回廊浮彫を対象に、バイヨン外回廊も参考にして登場人物の図像的な特徴やストーリーの配置に着目し、ジャヤヴァルマン7世の履歴との関係性からバンテアイ・チュマールの歴史的価値を示すことを目的としている。



図 1 バンテアイ・チュマールの位置

(2) 研究方法

研究方法は現地調査と文献調査の2点である。

現地調査では LiDAR 機能が搭載されている iPhone15Pro と Scaniverse というアプリを使用して浮彫の 3D スキャンを行った。本研究では浮彫の 3D データをもとに議論を進めた。

文献調査では BC の浮彫について 2015 年に P. D. Sharrock と B. Bruguier が書いた全面の解釈の概説を基礎とした。また、類似した浮彫を持ち、研究の進んでいるバイヨン外回廊についての記述も参考に

して分析を行った。

(3) ジャヤヴァルマン7世について

ジャヤヴァルマン7世の生涯について、ここでは主要な出来事のみを年表で示すこととする。

年代	出来事
～1145年	遅くとも1145年までに誕生
1165年 ①	チャンバ滞在中にアンコールでクーデターが発生 →ヤショヴァルマン王がトリプアナデーティヤヴァルマンによって殺害
1177年 ②	ヴィジャヤ王ジャヤ・インドラヴァルマンがアンコール都城を攻略 →ジャヤヴァルマン7世はアンコールに侵攻し奪還する
1181年	ジャヤヴァルマン7世即位
1182年～1183年 ③	バットアンバンでの反乱
1190年 ④	ヴィジャヤでのジャヤ・インドラヴァルマンによる反乱 →鎮圧後インドラ王子がヴィジャヤ王になる
1192年 ⑤	インドラ王子ヴィジャヤ追放 →チャム族の王子ヴィディヤナナがヴィジャヤ王になる
1193年・1194年	ヴィジャヤ奪還のためのチャンバ遠征
1218年	関連碑文に1217年～1218年の日付あり →この頃まで生きていたのではないかと推定

図 2 ジャヤヴァルマン7世の治世

2. 浮彫の概要

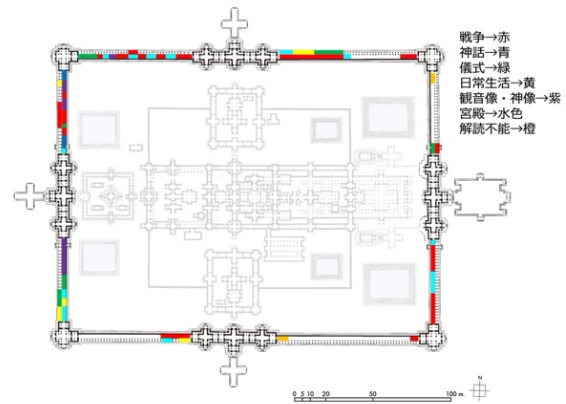


図 3 主題の分布

(1) 東面

東面はチャム族との陸戦と水上戦が主題の中心であるが、宮殿での出陣前か戦勝を祝う儀式など王族の儀式的様子も描かれている。

(2) 北面

北面は東面に引き続き、チャム族との戦争の場面が多く、特に西側では碑文 K. 227 のチャム軍との戦争に関する記述と一致する場面が描かれている。また、戦争に伴う軍隊の行進や戦勝祝いの儀式も描かれる。

(3) 西面

西面は乳海攪拌や怪物と戦う戦士、BC に特徴的な 8 体の観音像が見られ(現在現地で確認できるのは 6 体)、神話や宗教的な要素が強い。

(4) 南面

南面は大半が崩壊しており、解釈ができるのは南面西側だけである。主題としてはバタンバンでの反乱とその鎮圧の様子と、チャム軍との戦争が描かれている。

3. 浮彫とジャヤヴァルマン7世の治世の関係

(1) 王族の表現と北面西側

浮彫における王の表現として特徴的な要素は3つある。①上段に最大で描かれていること、②首飾りや髪飾り、帽子などの装飾品、③屋外の場面で周囲に傘が描かれることの3点である。

北面西側は、修復以前は大半が崩壊しており新たに解釈が必要な箇所である。東端から20m付近では、高い地位を示す帽子を被った人物が、チャム兵に囲まれ槍を向けられている。また、東端から45m付近には首飾りとチャム風の服を着た男が軍を指揮して、クメール軍が要塞を攻める場面が描かれている。K. 227では王子がチャム族の要塞を占領した帰りにチャム兵に囲まれてしまうが、2人の将軍が犠牲となり王子を逃すという場面が記されている。

北面西側の浮彫を見ると、K. 227の物語の流れと一致するように場面の配置がされており、北面西側はBCで発見されたK. 227と一致する箇所であると言える。

(2) バンテアイ・チュマールとバイヨンの比較

南面西側にはバタンバンでの反乱の様子と首謀者の首を王に献上する場面が描かれている。これはバイヨンにも共通している。しかし、登場人物に違いがあり、P. D. Sharrockはバイヨン版では描かれているチャム族の王子ヴィディヤナングナがBC版では消され、王の義弟であるインドラ王子のみが描かれていると指摘している。当時インドラ王子とヴィディヤナングナは後継者争いをしており、インドラ王子に縁の深いBCでも意図的に描かれなかったと推測している。

政治的背景から浮彫の描写が意図的に変えられている可能性は、他の場面でもあり得るだろう。

(3) ジャヤヴァルマン7世の生涯と浮彫の読み方

回廊浮彫の配置について、B. P. Groslierは出来事の年代順と出来事が起きた方角との一致という2つの説を考えた。

浮彫を年代順に並べた際に反時計回りに見ることができるという説については、水上戦が実在の出来事であるか真偽が怪しいこともあり、反時計回りの際に必ずしも年代順に並んでいるとは判断できないと考えた。また、改めて年表と配置を照らし合わせた際に、反乱とチャム兵による待ち伏せの年代から、時計回りの可能性もあることがわかった(図4)。

出来事が起きた方角と配置が一致しているという説については、チャンパとの戦争が北面にある理由が明確ではないことなどから必ずしも一致しているとは言えないと考えた。

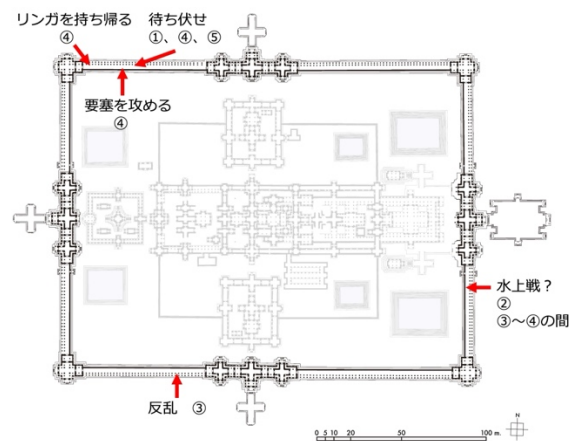


図4 浮彫と年代の対応(数字は年表と対応)

4. 結論

BCの回廊浮彫は、複数の解釈がある場面や周回方向、配置の意図など不明な点が数多くあるが、歴史的事項が多く描かれていることからカンボジア北西部の重要な遺跡であることは間違いない。バイヨン外回廊浮彫や碑文との比較検討を重ねることで、12世紀末から13世紀初頭のカンボジア史だけでなく、東南アジア史を解明していくための史料として、非常に価値が高い遺跡であると考えられる。

Abstract:

Banteay Chhmar in northwestern Cambodia was built in the late 12th and early 13th centuries, at the height of the Angkor dynasty. The bas-reliefs are longer than those of the Bayon and depict events during the reign of Jayavarman VII, and thus have the potential to reconstruct the history of the Angkorian Dynasty at that time.

The purpose of this study is to show the historical value of Banteay Chhmar in relation to the history of Jayavarman VII by focusing on the iconographic characteristics of the characters and the arrangement of stories in the Banteay Chhmar cloister reliefs with reference to the Bayon outer cloister.